

課題研究要旨

ムードルを使った英語多読学習プログラムの導入による、 英語読書の姿勢や関心及び読書スピードへの影響について

メドウズ・マーティン*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

1. 研究の目的

近年、日本の英語教育において、レベル別の英語リーダーを使った多読学習が色々な効果をもたらすことがわかっている。読むスピードが上がるという効果 (Nakanishi, 2015; Imamura, 2012; Bell, 2001)があるだけでなく、英語への興味が高まることで英語講読に対する姿勢が改善され、他言語で本を読む自信がつくといった効果 (Yamashita, 2013; Johnson, 2012)も確認されている。

本研究では、ムードル (Moodle) を使った多読学習の効果について、北海道名寄高等学校3年生「総合英語講読」選択履修者63名を対象に調査を行った。調査にあたっては特に2つのことを課題とした。ひとつは、「自主的なeラーニング学習の導入によって英語講読に対する生徒の姿勢が変わるか」、もうひとつは、「通常授業外に行うムードル・リーダーを利用した低レベルの英語多読プログラム(「多」読とは言え、名ばかりの「多」読ではあるのだが)が、読むスピードの向上につながるか」という課題である。

2. 研究方法

手順として、初めに、Moodle利用開始前の学力を調べるため、Speed and Accuracyのテストを実施した。その後、前期と後期に分けて、講読した本の内容について生徒にMoodle上のクイズに答えてもらった。前期・後期ごとに課題で指定された語数以上を生徒がクリアしたかどうかを調べた。後期の課題終了後、もう一度Speed and Accuracyのテストを行った。英語講読に対する生徒の姿勢の変化を調べるために、実施前と実施後に無記名によるアンケートを実施した。読解のクイズにアクセスするには最初のアンケートに回答する必要があるため、講読前のアンケート回収率は100%である。講読終了後にも2回目のアンケートを行った。ただ、このアンケートは任意によるものであるため、回収率は79%になった。また、通常授業終了後に日本人教師によって、一度だけの簡単な追加アンケートが生徒を対象に行われた。

3. 結果・考察

当初懸念されていた、個人のスマートフォンにて課題を行う事に関しては、高校生はとくに抵抗なく受け入れていた。むしろ、手軽に宿題がどこでもできるということに便利さを感じているようであった。Moodle Readerの特徴である、進行グラフで目標達成度が視覚化されていることも、生徒のやる気に繋がったようである。何よりの効果は、それまで英語の長文を読む時に一つ一つの語で止まってしまっていた生徒にも、無理矢理にでも最後まで読み切る習慣がついたことである。これにより読書の面白みを感じ、指定された語数以上を自主的に読む生徒が出てきた。そして英語学習のやる気を伸ばしていったように見える。また、生徒同士でおもしろい本を薦めあう姿も見られるようになり、この活動をきっかけに、「本を読む」こと自体に興味を持ち、図書室に通う習慣ができた生徒も現れるようになった。

課題終了後にアンケートをとったところ、半数以上の生徒がこの活動を「行なって良かった」「役に立っている」と答えていることから、しっかり取り組んだ生徒は成果を感じていると言える。同じく約半数の生徒がMoodleを使った授業を「後輩に是非勧めたい」と答えていた。上記より、今回のMoodleを使った多読学習には一定の効果が現れていたと考える。特に読書を通じて様々な場面で使われている「生きた英語」に触れることが、生徒の興味関心を引き出すきっかけになったことは大きい。今後もこの活動を継続していきたい。

今後の調査の方針として、Reading Speed and Accuracyのテストで得たデータを統計的に分析し、Moodle Readerを使った学習によってどんな効果が出たかを把握するつもりである。効果の内容については、2017年6月の全国学会で発表し、論文としてまとめる予定である。

*責任著者 E-mail: meadows@nayoro.ac.jp